

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



写真撮影：戸田慎一 @ COLONY in New York (1978)

《ジョニー》

雨の日も風の日も、ほぼ毎日のように、その男はアッパーウエストのブロードウェイ沿いにあるピザ屋とスーパーが並ぶ通りに立っていた。小銭の入った紙コップを右手でチャラチャラと軽く鳴らしながら、人懐っこい笑顔で通り過ぎる人々ひとりひとりに明るく元気な声をかけながら…。

見た目では30代半ばから40歳前後だったであろう。少しエディー・マーフィーにも似たその風貌は、ホームレスと呼ぶには小綺麗な身なりであり、独特の異臭も放ってはいなかった。男の名前はジョニー。

とにかく人なつっこい男で、小銭目当てに立っているのだが、あまりに陽気なためか、悲壮感のようなものは漂ってこなかった。週の半分以上、仕事帰りにスーパーで買い物をするため、ジョニーの前を通り過ぎることが多く、この辺りでは夜遅くに日本人の姿を見かけることは珍しいらしく、自分の姿を見つける度に「Hey! Nice Man!!」と声を掛けてきた。ジョニーは、とにかく自分をおだてるのであった。

最初の頃は「面倒くさいな…」と思い、関わるのを避けて完全無視の状態だったが、来る日も来る日も変わらぬその笑顔と人懐っこさに負け、そのうち買い物後にジョニーの紙コップに小銭を入れることが多くなり、やがてほぼ毎回入るようになっていった。そして、ジョニーもこれまで以上に親しみを持って自分に声をかけるようになった。

ほぼ毎日のようにといっても、時間帯や曜日によってはジョニーの姿が見えない時もあり、ジョニーの姿が見えない日は、何となく寂しさを感じるようになり、ジョニーの人懐っこい笑顔を見るたびに、妙な安心感を抱くようになっていった。それくらい人を元気付けるパワーみたいなものがあつたのだと思う。いずれにしても、ほぼ毎日のようにジョニーはいつもと同じ場所にいつもと同じ笑顔で立っていた。

4年間アッパーウエストで暮っていたが、やがて日本に引き上げる時がやって来た。マンハッタン最後の夜…。アパートに帰る途中に、ジョニーが立っているあの場所に出かけていき、ジョニーに「明日、日本に帰らねばならない」と告げた。「Oh! Men」と大げさに首を横に振り、淋しげな表情を浮かべるジョニー。

その時、ふと閃いた…。帰国のための大掃除後、部屋の隅に置き去りにされていた1セントと5セントのコインがほぼ満タンに詰まったガロン・サイズのペットボトル。おつりの小銭を4年間コツコツ貯めていたもので、知らぬ間にほぼ満タンになっていた。重さはかなりのもので、金額は想像できなかったが50ドル前後にはなっていただろうか。このニューヨークで日々笑顔と安らぎを与えてくれたことに感謝の意を込めて、このペットボトルを丸ごとジョニーにあげようと思ったのだ。「きみにプレゼントがあるから、ちょっと待っていてくれ」と告げ、アパートに戻った。ジョニーは少し驚いたような表情を浮かべつつ、ニヤッとまた人懐っこい笑顔を浮かべた。

アパートから5分ほどの距離であったが、この小銭が満タンに詰まったガロン・サイズのペットボトルは、腰が砕けそうになるほど重かった。両手で抱えてゆっくりとアパートの階段を降り、ジョニーの所まで腰をかかめながら運んだ。

「ジョニー、こいつを買ってくれるか」。ジョニーは目を丸くして、この大きなペットボトルを見つめた。ジョニーにペットボトルを抱え渡すと、そのあまりの重さに声をあげて笑うジョニー。「これを俺にくれるのかい！」とビックリしながら、「Thank you very much!」と返すジョニー。また何年後かにニューヨークに戻ってくると約束し、握手をして別れた。

だが、別れ際にジョニーがポツリと呟いた。「この金は、俺の口座(Account)に入れさせてもらおうよ！」と…。「俺の口座？」ホームレスも自分の口座を持っているのか。いや、それともジョニーは別にホームレスなどではないのか。一瞬の間にいろいろな考えが頭の中をよぎったが、そんなことはどうでも良かった。とにかくジョニーは良い奴だった。

次の朝、住み慣れた大好きな街ニューヨーク、マンハッタンを離れた。昨夜ジョニーと別れたあの場所の前をタクシーで通り過ぎると、そこにはジョニーの姿はなく、2~3匹のカラスがゴミ袋を漁っていた。

今でも時々、ジョニーの人懐っこい笑顔を思い出す。相変わらずあの場所に立っているのだろうか…。いつの日か再会できる日を楽しみにしている。ジョニーは紛れもなく、僕にとってマンハッタンの夜空に輝く星のような存在であった。